名所物見の旅　其の四拾　那須連峰山麓の温泉を訪ねて ①

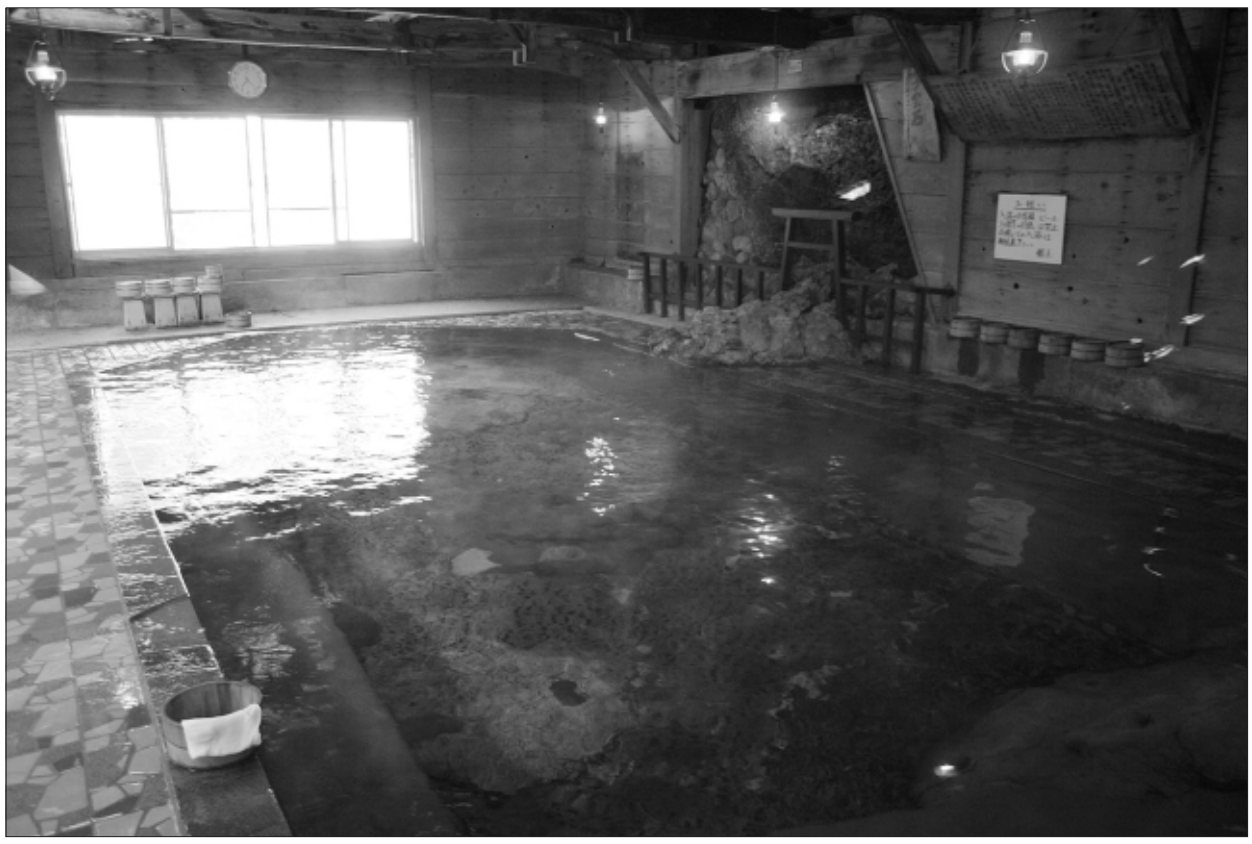
文・写真：河辺雄二、CFAY広報課

秋に那須連峰を縦走して白河方面に下山路をとり、阿武隈川上流の甲子（かし）温泉に一泊した。天候にも恵まれ、噴煙を上げる茶臼岳から朝日岳への稜線は多くの登山者で賑わいを見せていたが、会津藩、白河藩、黒羽藩の国境いに三本の槍を立てたという故事のある三本槍岳を過ぎると山稜に人影はまったく見えなくなり、たった一人の静かな山旅となった。動物たちの冬籠り前のこの季節、“熊出没に注意”と山道の所々に警告板が立ててある。悪いことにホイッスルや鈴などの熊除けを忘れてきてしまったので、口笛を吹いたり大声で怒鳴りながら深い熊笹の中を進んだ。月の輪熊といえども突然の遭遇は危険度が高いので、見晴らしの良い場所に出るまでは肝を冷やしながらの行軍であった。

下りついた甲子温泉は南北朝時代の至徳元年（1384年）に州安和尚によって発見され、この年の干支が甲子（きのえね）だったことから甲子（かし）温泉と命名されたと伝わる。江戸後期の幕府老中職を務めて寛政の改革を断行した白河藩主・松平越中守定信はこの甲子温泉をこよなく愛好し、「勝花亭（しょうかてい）」という別荘まで建て、長逗留したという。甲子温泉は現在一軒宿の大黒屋が営業しており、定信の「勝花亭」は敷地内に健在で、内部は新装されて予約すれば宿泊も可能だ。本館は鉄筋二階建てで、今年（平成二十一年）改装の予定があり、また以前ように木造建てになるそうだ。営業開始日は要確認のこと。今まで冬季は休業していたが、会津方面への国道開通に伴って通年営業になるらしいので、雪見の湯を楽しめるようになる日も近いだろう。

温泉は宿の前を流れる渓流の対岸にあり、宿の一階から屋根付きの階段を百段近く下り、渓流に架かる鉄橋を渡ると名物の大岩風呂の湯小屋がある。湯は石膏芒硝苦味泉で源泉温度44~60℃。岩の間からこんこんと湧き出している。神経痛などに効用があり、肌にやさしく湯加減もちょうど良い。そして何より広々とした湯船は気持ちよく、足を延ばして温泉を楽しめるのがうれしい。とても心地よくて時間の経つのも忘れて浸っていられる。

大岩風呂の中央には子宝岩というこの風呂の名の由来となった大岩があり、この岩に座ると子宝に恵まれるという。大岩風呂は基本的に混浴であるが、隣に女性専用風呂が出来てからは混浴になることはまずなくなった。混浴は遠慮したいが広い大岩風呂に入りたいという女性のために、一日二回女性専用時間が設けてある。屋外には温泉プールも新設され、親子連れにも喜ばれている。



甲子温泉大岩風呂。温泉の中には子宝に恵まれるという子宝岩という大岩がある。ランプの湯小屋は情緒に溢れ、温泉通の外国人にも人気が高い。

のんびりと湯に入っていると、外国の若者が二人入ってきた。聞けばハンガリー人だという。私にはハンガリーの知識などほとんどなく、写真家のロバート・キャパとかレアルマドリッドで活躍した世界的名選手プスカシュぐらいしか頭に浮かんでこない。旅行者かと思っていたら、彼らは日本に仕事で来ており、横浜に住んでいるという。なんだ、私と同じ横浜市在住ではないか。驚いたことに彼らは甲子温泉に泊まっているわけではなく、あちこち温泉巡りをしていて、今夜は北温泉に泊まるのだそうだ。え～！北温泉の名はあまりにも懐かしく、若い頃に訪ね歩いた思い出がある。最近は外国人にも温泉通の人が多いらしく、渋い宿の人気が高いというのもうれしいことだ。秋田の乳頭温泉郷“鶴の湯“に行った時も外国人が多いのに驚いたが、彼らはホテルよりも木造の湯治場の雰囲気を残す宿に泊まる方が楽しいということだった。

翌日は快晴で宿周辺の木々は、朝日で美しく輝いている。私は朝食前の散歩と撮影を楽しみながらも、心は北温泉に飛んでいた。宿を後にしてバスに揺られながら、次回の温泉行は三十数年ぶりとなる北温泉へ行こうと決めていた。

白河から会津方面へ出るには、昔から甲子温泉を経由して歩いて甲子峠を越えるのが唯一の交通手段であり、登山道に国道の名が冠される全国でも珍しいものであった。最近トンネルが完成したので、この標識も撤去されたはずである。

甲子温泉は宿から渓流を挟んだ対岸に大岩風呂と女性専用風呂の湯小屋、温泉プール、露天風呂などが並ぶ。